



嵐の前の静けさ
南海部 覚悟

目次

プロローグ	1
(1)	2
(2)	3
(3)	4
エピローグ	6

プロローグ

巖島神社上空である。

凜と立つ朱の鳥居が、曙の滯筋に眩しい。

弥山の山肌を掠めて、エアロバイクは 180 度旋回する。

秋山修平はその日 3 連休の非番明けであった。

今朝は新しい相棒と一緒に、初任務だ。

新型エアロバイクは、オーソドックスな 4 プロペラ式ラジコンドロンの制御技術をそのまま流用した。

旧型が、ジンバル機構を有する可変ピッチプロペラを収めた玉籠を複数連結して、ポンディングドーナツのような複雑な形態・システムであったのに較べて、遥かにシンプルな構成となっている。

旧型の致命的な欠陥として、加速力及び最高速度の低さが指摘されていた、高速道路を疾走するスポーツカーを追跡し切れないのである。

空中での精密な姿勢制御を可能とする複雑な機構が、重量増加を招いていた。

頭上のポンディングからぶら下るような着座姿勢も、多くの白バイ警官に不評であった。新型エアロバイクは本体フレーム上のサドルシートに跨るバイク然としたそれに改められた。

コントロールスティックはバイクハンドルに、スロットルレバーはアクセルグリップに、ただし何れもフライバイワイヤーで、可動域は微少だ。

パイロットの両足先と頭の左右後方、都合 4 個のダクトッドプロペラが、上から見た本体を囲う正方形の各頂点に配置されている。

前後のプロペラには約 1m の取り付け高さの違いがあり、後方プロペラの下には本体と直角に 2 m 長の樹脂製コンテナが固定されている。

急病人や事故の怪我人を、コンテナに寝かせて搬送する、旧型ではキャンバス地の担架だったが、蓋つきの樹脂製コンテナに改められた。

バイク操縦の肝は、コーナリング時機械と人体其々の重心の取り方にある。

新型エアロバイクも同様、パイロットは体を左右に傾けて旋回する、加速は前傾、減速は後ろに反り返る。

4 つのプロペラのトルク制御と相まって、慣れれば俊敏な低空飛行が可能だった。

眼下の足元に無数のマストが林立する、デルタ南端のヨットハーバーだ。

太田川デルタの河口付近を、広島湾の縁に沿って東に飛行する。
穏やかな瀬戸内の海水面に淡いピンクの陽光が何処までも煌めく、宇品港の波止場に2隻のフェリーが係留されている。
防波堤の遙か先を、白波を立てながらジェットフォイルが疾走し始めた。
大型のバルクタンカーがゆったりとした航跡を拓ける、そのうねりに見え隠れしながら数隻の釣り船が、早朝から網を巻き上げている。
沖に視線を移すと、水平線に霞んだ遙か先に、長距離フェリーの白い船尾がぼんやりと消えかかっていた。

いつになく平和な、瀬戸内海の風景だった。

(1)

江田島を迂回して、呉上空に達する。
山肌に新しい住宅が整然と並ぶ、呉市は広島のベッドタウンというには多少距離がある。人口減少に伴い大規模な住宅団地の開発は下火になったが、リモートワークやテレワークの普及から、広島市北部からの移住が増えている。

新しい団地を見下ろすと、屋根に乗るソーラーパネルが殆ど無くなった。
これは、家庭用安定核原子炉の普及も要因の一つではあるが、10年前のスーパー台風襲来が大きく影響している。
長崎県佐世保市に上陸時の中心気圧が880hPa、日本海沿岸沿いに列島を縦断し、佐多岬灯台で最大瞬間風速103.5 m/sを記録した。
広島地方気象台でも90.2 m/sを観測した最強台風である。
木々の小枝、瓦、看板、ビニル傘、カーポート屋根、外壁トタン、吹き上げられた砂粒、小石、ガラス片、樹脂片、シート類、ワイヤー、ケーブル、自転車、衣類、ビニルハウス、園芸用支柱、植木鉢、ゴミ箱、等々の屋外物が空気と混然一体となって、秒速90 mで建物を襲った。
多くの木造住宅は、テラス窓にシャッターを設置していたが、この強風では殆ど役に立たなかった、吹き上げられたシャッタースラットが、凶器となって警備巡回中の消防隊員の頭上に降り注いだ事案もある。

テラス窓にシャッターが無くなると、巨大な複層ガラスが直接風雨に曝される、様々な飛来物と混然一体となった秒速 90 m の烈風にである。

一瞬にしてガラスが粉碎され、開いた大穴から建物に烈風が注ぎ込む。

逃げ場を失った空気は、そのままリビング上部の吹き抜けに溢れて、天井・屋根を吹き上げソーラーパネルを粉碎しながら上空に巻きあがる。

落下する破片が、再び他のパネルを破壊するのも想像に難しくない。

耐震性能を追求するあまり、極限まで屋根を軽くしたのと、リビングの明るさを追求するが為、極端に巨大なテラス窓を設置した弊害かもしれない。

事実最近の木造住宅には、ソーラーパネル同様引き違いのテラス窓、吹き抜けの大きな嵌め殺し窓が無くなった。

海上自衛隊呉基地上空を飛び越え、JR 呉線に沿って竹原方面に向かう。

つづら折りの海岸線が、コンクリートの護岸で狭い道路と隔てられる、昔ながらの汀の佇まいだ。

入り江のえぐれた部分に砂浜が広がって、護岸の階段から降りてきた家族が、朝からパラソルを拵げて海水浴を楽しんでいる。

(2)

「——広島県警交通機動隊です！ ここは遊泳禁止となっております、午後からうねりが高くなる予報も出されていますので、速やかに遊泳を中止し、安全な場所へ退去願います！」

上空からマイクで促すものの、素直に従う人間は少ない。

更に続ける、「瀬戸内西部海域で毒クラゲの大量発生が報告されています。当海岸は防護ネットの設備もありませんので……。」

やっと重い腰を上げ始めた。

ホバリングで一息ついて、遙か東の水平線 竹原方面に目をやると、初夏の陽光に白く照らされて何か動いている。

ヘルメットのデジタルスコープでズームをかけると、2 隻の水上バイクが蛇行しながら水飛沫を立てていた。

その更に先には小型ヨットの一群が、お揃いの三角帆を揺らしながら、東進しているようだ。

嫌な胸騒ぎを感じてアクセルグリップを掴んだ直後、本部から無線が入った。

「——瀬戸内ゴルフ場直下の海岸に、大量の魚が漂着している旨、クラブハウスより通報あり。不測の事態に備え、現場対応願う！」

断崖下の小さな入り江は一面銀色の魚影で埋め尽くされていた。

ラウンド中のゴルファーが、白いOB杭の脇から崖を見下ろしている。

漁船が入り江に集まってきて、片端から魚を引き上げ始めた。

波の穏やかな砂浜を見つけてエアロバイクを着陸させる。

「——お巡りさん、こりゃあ内等の漁業権じゃあけえ拾うて帰って良からう？」

漁船を飛び降り、駆け寄ってきた漁師が捲し立てた。

「ちょっと待ってください！調べてみないと食用に出来るかどうか・・・悪い病気を持ってるかも知れんし。」

「病気なんてあんた、こげえ生きがええんぞ！」そう言いながら80cm程の一匹を、跳びはねるのを押さえながら両手で差し挙げた。

崖の根元の護岸を迂回して、白衣の三人が駆けつける、「竹原市保健センターの者です、サンプルを持ち帰って分析します。それまで勝手に獲らないでください！」

指示を出している職員に聞いてみた。

「——鱈ですねえ、この時期沿岸を回遊して産卵します。でもこれだけの大群がいか所に漂着するのは・・・何かに追いかけられたんですかねえ？もしそうなら、1m近い獲物を捕食する輩ですから、それこそ相当な怪物なんでしょうが・・・。」

急に思い出して海を振り替える。

挨拶もそこそこに緊急離陸、先程の水上バイク目指してフルスロットル！

(3)

エアロバイクを前傾させ、海面すれすれに突き進む、プロペラのエアストリームで盛大に水飛沫が上がる、水平線がぐんぐん近づく。

やがて、蛇行する水上バイクの白い航跡が見えてきた。

その後方100m程の海の色が、何だか変だ。

上昇して海面を確認する。

10m近くある紡錘形の暗い影、中央に巨大な青黒い背ビレが白波を立てていた。

「——鮫だあ！鮫が水上バイクを追いかけている！」

水上バイク、巨大鯨、エアロバイクの順番で海上を疾走する。

2隻に後方からバイクで警告、搭乗する三人の若者は遊びに夢中で気が付かない。

その内、先行する小型ヨットの一団も見えてきた。

同じ色の救命胴衣を身に着けた近くの高校のヨットクラブか・・・鯨がヨットに近づけば、事態は更に深刻だ。

水上バイクの前に出て進路を妨害する、若者の一人が鯨に気が付いて、大慌てで岸に向かい始めた。

もう一隻の二人は怪訝な顔をしつつ、そのままヨットの方へ向かっている。

リアルタイムで全映像を送信していた本部から指令が入った、「拳銃の使用を許可する！ 要救助者の位置に留意し、鯨の頭部先端を狙え！ 鼻先が鯨の唯一の急所ようだ！」

不安定なエアロバイクの上から拳銃で鯨を撃てというのか！

エアロバイクの運用研修に忙しくて、最近射撃訓練を受けていないのを思い出した。

どうにも自信が無い、そもそもニューナンプのリボルバーに38スペシャルの組み合わせで、あの巨大な鯨に効果があるのだろうか？

その旨本部に伝えたと、「貴官の憂慮も理解できるが、現況で対応できるのは貴官のニューナンプと38スペシャル以外に無い。結果はどうしても、やれるだけやってみてくれ！」

と、無責任なことを言う。

覚悟を決めて、腰のホルスターに手をやる。

シリンダーには実弾5発が出動時から装填されている。

エアロバイクを鯨の背後からゆっくりと近づけ、背ビレの直上でオートパイロットに切り替える。

ニューナンプのグリップを両手で支えて二つのプロペラの間から照準する。

流石に、水上バイクの二人も鯨に気が付いたようで、一気に速度を上げて逃げ始めた。

鯨の鼻先は水中に在って中々海上に現れない、水上バイクが逃げれば鯨もそれを追って益々波を被り、至難の照準となる。

沖を横切る大型船の航跡波を受けて、水上バイクが大きくバウンドし、若者二人が海上に投げ出された。

同時に鯨の頭部が持ち上がる、巨大な口を大きく開いた証拠だ！

尖った鼻先に向けダブルアクションで5発全弾撃ち尽くす。

激しい水飛沫が周囲を包み込む。

波のまにまに恐怖に引き攀った若者二人の顔が見え隠れする。

鯨のいた海面が白く渦を巻いている。

確かに手応えがあった！

——その時だった！

眼下の海面が大きく口を開いて、無数の歯列が植わる巨大な白い歯茎が現れた。

物凄い力で、エアロバイクに向かって海上に立ち上がる。

秋山の視界の端に、一瞬黒い塊が現れオレンジ色の強い光へと変わって、歯茎の廻りを包み込んだ。

きな臭い強い匂いが鼻を突いた。

気が付くと、巨大な二つの肉塊が波のまにまに横たわっていた。

エピローグ

竹原港明神岸壁の駐車場である。

黒パトの後席で、一組の男女が真剣な眼差しで見つめあっていた。

玲子が秋山を尋問するのは初めてだ。

「——何があったの？ 秋山君。」

若い白バイ警官を労わるように話しかける。

「自分は、気が付いてなかったんです……。」

恐怖に震える唇から、低い声が絞り出された。

「——黒装束の男と、黒ずくめの水上バイク？」

「あれが視界に入る迄、何処にいたのか何処から来たのか、全く覚えていないんです、白バイ隊員として失格です！」

「気にしないで、あれは普通の人間じゃないから……。」

「——普通の人間じゃない？」

「あなたも3年前の京都の事件、覚えてるでしょ、その時の忍者……。」

「ロボットのテロから、皇室を護ったという黒装束の忍者……ですか？」

「私たちは彼を“沖田総司”って呼んでるの、幕末の剣豪よ。でも、今回の武器は日本刀じゃなかったようね。」

「大きな三日月形の刃先に長い柄が付いていました。薙刀ですねあれは、それにしても障害物のない海上を音もなく近付いて来て……。」

「あなたが本部に送っていた映像を、何処かでモニターしてたんでしょうね。」

「あのオレンジの光がモンロー・ノイマン効果なんでしょうか？——10 mもある巨大鯨を真っ二つにして帰っていったんですよ。」

「——帰るとき何か言ってた？」

「間もなく嵐が来る、今は“嵐の前の静けさ”だって、上の者にそう言っておけて……。」

頭部と尾部に切断された鮫の死体は、暫く海上に浮いて漂っていたが、竹原署の警備艇が到着する頃には、二つとも海底に没していた。

大量の油と体液が固まって、海面に白い層を作っている。

唯一それだけが、今回の事案の痕跡だった。

秋山修平は今日の任務を完了すべく、東の空を目指して再び離陸する。

眼下の駐車場から、黒木玲子が手を振っている。

新年度から、広島県警本部刑事一課長に着任した筈だ。

予てより、警察庁のスーパースターとはいえ、女性警官の出世頭だ。

上空に上がって、夕日に染まる穏やかな海面を見渡して、はっと気が付いた。

“嵐の前の静けさ”

———そう言えば明日は嵐だ、今年最初の上陸台風になるかも知れない。

今日のこの任務も、台風前日の海岸線安全確認だった。

十年前のスーパー台風には及ばないものの、似たようなコースを辿る可能性がある。

大きく旋回して西の空を見渡すと、暗い雲の大きな塊が水平線の上に拡がって、何やら胸騒ぎがしてきた。

終わり———。

*本編は、全てフィクションであり、実在する個人・団体等とは一切の関係がありません。悪しからずご了承ください。

尚、表紙に使用しました写真は PhotoAC 様より転載させて頂きました。*

風の前の静けさ

著 南海部 覚悟

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
